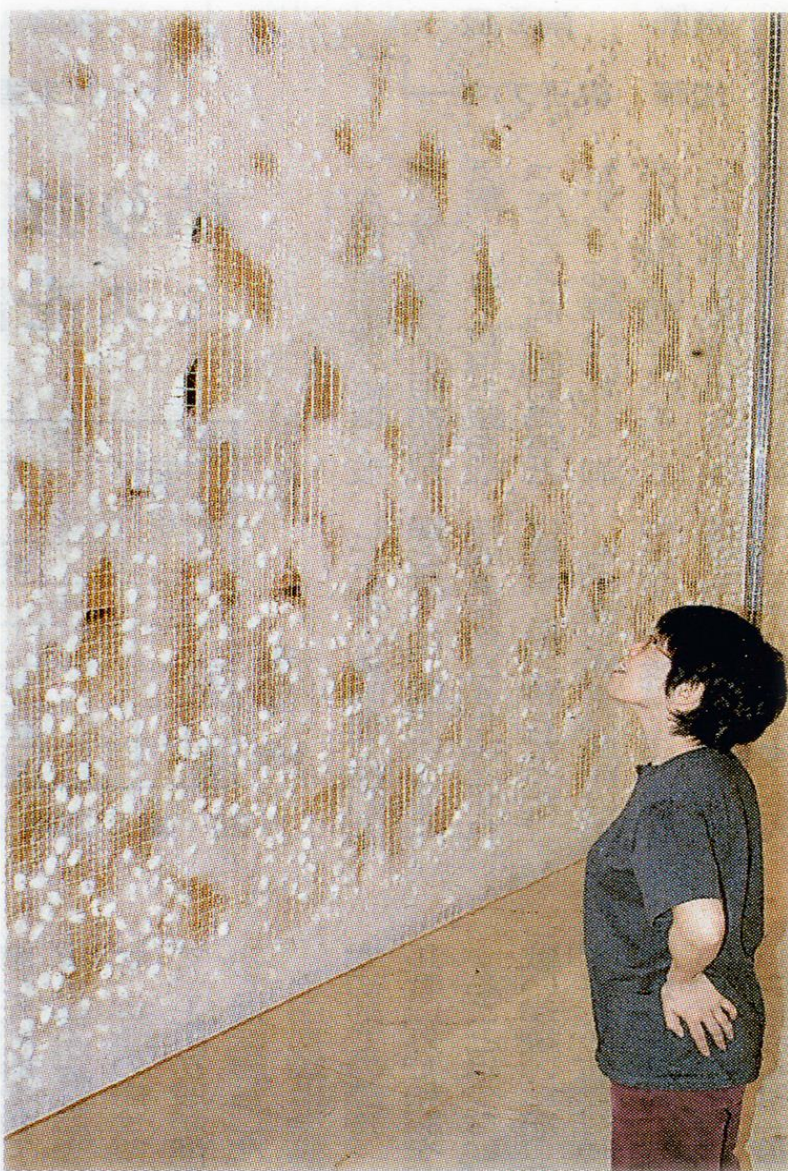


刻一刻変わる繭素材に



天井からつるされたパネルを絹と繭
が埋める＝入善町の発電所美術館で

なのか。原点に、返ることが作品になる。

「いつも最終デッサンがない。仕掛けを作るまでが僕の仕事で、どんな形になっていくかは素材任せ」と話す。二度と同じ姿を見せない作品は、何度も足を運ぶ楽しみがある。

2 月 1 日まで。月曜日と、祝日の翌日は休館。入場料は一般 500 円、高校・大学生は 300 円、中学生以下無料。問い合わせは同美術館（0785・78・0621）へ。

蚕はく糸キラキラ

天井からつるした大きなパネルに 5 万匹の蚕を放し、成虫の蛾になるまでを見せる「角永和夫展 SI LK」が入善町の発電所美術館で始まった。

刻一刻と姿を変える「作品」。作者の角永和夫さん(60)は「自分でもどんな完成品ができるのかわからない。でもそれが楽しみ」という。

大正時代の水力発電所を改修した同美術館の天井は約 10m。そこから縦 8m、横 4m のアルミパネルが三つぶら下がり、パネルには幼虫がはいった白い糸と親指大の繭が混在している。「きらきらしてきれいでしょ」と角永さん。窓から差し込む光に糸が映える。

「これが絹の素材そのものです」「素材」が角永さんのテーマ。今回は普段、洋服として身につける絹が作られる過程を題材にした。「編んだ後でない、蚕がはいったばかりの糸。それを提示したかった」とう。

入善町の発電所美術館 で角永和夫展

これまでも薄く切った丸太が乾いて反る様子や、除湿器を置いた密室に入れた竹が自然と割れる音など天然素材の変化を示す作品を生み出してきた。人に身近なものが、どういう性質を持つもの